



Title	カイロ方言の能動分詞における「結果残存性」再考 : 語用論的観点から
Author(s)	中道, 静香
Citation	関西アラブ・イスラム研究. 2002, 2, p. 71-88
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105820
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

カイロ方言の能動分詞における「結果残存性」再考 —— 語用論的観点から ——

中道 静香*

“Resultativeness” in the Active Participles in Cairene Arabic Revisited: A Pragmatic Perspective

It has so far been pointed out that the active participles in modern Arabic dialects often bear verbal functions. They can indicate events that involve past, present, and future time references as the finite verbs (i.e., the suffix forms and kinds of the prefix forms) do. This paper focuses on the suffix forms and the active participles involving past time reference in Cairene Arabic and examines the difference between them from a pragmatic perspective.

The previous studies have characterized these two forms as follows: the active participles invoke “the intervening unbrokenness of the ‘state arising from the event’” and imply “current relevance” which was originally a term which characterizes English present perfect, while the suffix forms do not concern them (Mitchell 1978: 230, 242). In fact, however, we find some inconsistent cases with this characterization.

I propose that the unbrokenness of the physical resultant state is not a crucial differentiating point between them. More important is whether the speaker supposes that “shared knowledge” about the events has been constructed between participants of the conversation or not. The active participles do not grammatically indicate time reference as the finite verbs do. Thus the participants of the conversation need to share at least information about time reference of the event. If the speaker assumes that the event is given information in that the participants have witnessed it or they have already introduced the topic related to it in their conversation, or if the speaker intends to imply such an assumption, he/she will choose the active participles.

One of the most important roles of the language is to exchange information. In order to ensure a smooth exchange of information, the speaker has to take into consideration the knowledge that he/she and the addressee would share. In Cairene Arabic, the active participles serve as implying “shared knowledge” assumption of the speaker.

* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程 単位取得退学

1. はじめに

現代アラビア語諸方言の特徴の一つに、能動分詞の動詞的用法の多用が挙げられる。例えば Cuvalay-Haak は、「現代アラビア語諸方言ではとりわけ、能動分詞が動詞的な機能 (verb-like functions) を果たしており、それは動詞体系の中に統合されていると見なすことができる」と述べている (1997: 170)¹⁾。アラビア語に限らず、セム諸語における名詞形 (主に分詞) は新たな動詞体系を作るための一般的な手段であり (Caubet 1991: 209)、むしろアラビア語諸方言のそれは、現代ヘブライ語や現代アラム語と比べると未分化の状態にあると言ってもよい²⁾。能動分詞の適用範囲の比較的広いカイロ方言³⁾でさえ、それは、あらゆる動詞語彙に対して包括的な一定の動詞的文法機能を獲得しているわけではなく、語彙によって様々なテンス・アスペクトを示す。すなわち、個々の動詞の意味と絡み合いながら、既存の定動詞の領域の一部を受け継いでいるにすぎない。裏返せば、このような語彙依存的性格をもっているからこそ、能動分詞はヴェンドラー流動詞分類の指標の一つとして利用されてきたとも言える (cf. Eisele (1999: 129))⁴⁾。

本稿は、カイロ方言における定動詞と能動分詞とがどのような役割分担を行いながら動詞体系を構築しているかという問題に関して、全体像を提示するには至らないが、以下の観点から明らかにしようとするものである。すなわち、過去指示を行う接尾辞活用形と能動分詞に考察の重点を置き、これま

- 1) もちろん、文語アラビア語にもこのような動詞的 (すなわち、何らかの時間指示を伴う) 能動分詞の用法が存在する。すでに Sibawayhi の *Kitāb* には、能動分詞 *qārib* が *yaqribu*, *sa-yaqribu*, *qaraba* の意味で用いられるという記述がある。ただし過去を指示するものとして挙げられている例は、定冠詞が付されていたり、後続する属格名詞と共にイダーファ構造をなしている能動分詞であり、限定されている場合に限って過去指示が可能になると考えられていたようである (Sibawayhi I: 130-131, 171-172)。また Mitchell (1978: 230-233) によれば、Ibn Yaʿqūb も同様の問題に注目しており、構文の如何にかかわらず能動分詞の過去指示を認めるクーファ学派と、上記のような一部の構文にのみこれを認めるバスラ学派との見解の相違を紹介している (筆者所有の版での該当箇所は、Ibn Yaʿqūb II: 76-77)。なお、文語アラビア語の能動分詞に関する現代言語学的観点からの研究としては、コーランに現れる能動分詞を分析した Kinberg (1992) がある。
- 2) 現代ヘブライ語において能動分詞が現在テンスを示すものとして定着している他、現代アラム語に属する諸言語群では様々な形で分詞が動詞体系に組み込まれている。特に現代東アラム語 (Modern East Aramaic) では接尾辞活用形および接頭辞活用形の形式が崩壊しており、これに替って分詞が動詞の語幹として機能し、人称活用も行う (高階 (1998: 1644-1645))。
- 3) Caubet は、接尾辞活用形および接頭辞活用形の両形式が、遊牧民起源の方言では時間に基づいて、定住民起源の方言ではモーダルレベルで対立していると述べており、これに応じて能動分詞が担う役割の範囲も異なるとしている。定住民起源の方言の方が、能動分詞の表す意味範囲が広い。遊牧民起源の方言では、現在完了の意味ではあまり使用されず、使用されるとしても話者の攻撃的あるいは軽蔑的態度を伴うといった特殊なコンテクストを必要とする (1991: 211-212, 218-219)。
- 4) 精度の差はあるが、能動分詞を一つの指標として語彙アスペクトによる動詞分類を行った研究として、文語アラビア語では McCaus (1976)、カイロ方言では Woidich (1975)、el-Tonsi (1992)、Eisele (1990b, 1999) がある。

で能動分詞を特徴づけるために度々使用されてきた「結果残存性 (resultativeness)」や「発話時関連性 (current relevance)」といった概念を問い直す。そして両形式の違いが、物理的な “the intervening unbrokenness of the state arising from the event” (Mitchell 1978: 230) の有無という観点では説明できないことを指摘し、むしろその出来事が対話者の意識の上にのぼっているかどうかに関する話者の判断によって、使い分けられていることを示す。

なお、本稿で引用したコンテキストを含む用例は、主に Alī Salīm による喜劇 *Madrasat al-mušāgibīn*, Maktabat Madbūlī: al-Qāhira から取った。

2. 能動分詞の時間指示

単に時間指示という観点から見れば、カイロ方言の定動詞である接尾辞活用形、*bi-* 接頭辞活用形、*ḥa-* 接頭辞活用形が、それぞれ過去、現在、未来の時間指示を行う一方で、能動分詞も過去、現在、未来の出来事を表すことができる。

- (1) a. *huwwa faatīḥ il-baab min saaʿa.*
 he open/ms/AP the-door from an hour
 ‘彼は一時間前にドアを開けた。’
 b. *huwwa saakin fi šaqqa qadiima dilwaqti.*
 he live/ms/AP in a flat old now
 ‘彼は今古いアパートに住んでいる。’
 c. *huwwa gaay bukra.*
 he come/ms/AP tomorrow
 ‘彼は明日来る。’

ただし、このうち現在指示における定動詞の *bi-* 接頭辞活用形と能動分詞の関係は、他の時間指示における定動詞と能動分詞との関係とは異なるものとして、別個に扱う必要がある。というのも、現在を指示する二つの形式は、ある一つの動詞に対して相補的であったり、ある動詞が含み得る事態のうちの異なった局面を表すのに対し⁵⁾、過去あるいは未来を指示する定動詞と能動分詞の関係は、“quite close in some ways” (Eisele 1999: 130) と言われたり、言い換えが可能である (Mitchell 1962: 90) とみなされてきたことからわかるように、多分に重なり合う部分があるからである。現在における点的事象とい

5) 例えば、*bi-yīš/ʿaayīš* (* /live), *bi-yiqra/qaari* (read/*), *bi-yilbis/laabis* (put on/wear), *bi-yismaʿ/saamiʿ* (listen to/hear) などの対照。ただし、ここで意図されているのは、個別事象を表す文 (Eisele (1999: 50-59) が言うところの SPECIFIC time reference を含む文) における相補性であって、現在の習慣を表す文や総称文(同じく NON-SPECIFIC time reference を含む文)については、あてはまらない。

うのは基本的にありえないため、両形式はともに継続性を示すことになる⁶⁾。どちらの形式が選択されるかは、個々の語彙の意味特性、特に動性の有無 [±dynamic] によって決まる。具体的動きを欠く動詞、すなわち物理的・心的状態や長期的活動を表す動詞の継続的現在、能動分詞によって表され、一方、具体的な動きをもつ動詞の継続的現在、*bi-* 接頭辞活用形によって表される⁷⁾。よって (1b) で示した通り、「住む」のような長期的活動であり具体的な動きを欠く動詞の現在指示は、能動分詞でしか表せず、同じ動詞の *bi-* 接頭辞活用形は (2b) のような「習慣」の解釈においてのみ可能となる。

- (2) a. **huwwa bi-yuskun fi šaqqa qadiima dilwaqti.*
 he live/3ms/bi-prefix in a flat old now
 b. *huwwa bi-yuskun fi šaqqa qadiima lamma yiigi mašr.*
 He live/3ms/bi-prefix in a flat old when come/3ms/prefix Egypt
 ‘彼はエジプトに来到と、古いアパートに住む。’

反対に、「踊る」のような具体的動作を表す動詞では、*bi-* 接頭辞活用形が現在

6) ただし、モダリティを含む発話や遂行的発話 (performative) についてはこの限りではない。中右は、話者の主観的態度の表明であるモダリティの構成要素として「話者の瞬間的現在」を挙げている (中右 1979: 227-229)。また「遂行発話節は心的動詞節と同じく、より包括的なモダリティという同一意味範疇のもとにまとめられる」 (中右 1994: 81-96) と述べているように、遂行的発話も同じく話者の瞬間的現在に根ざしたものと考えている。さらに遡るならば、言語行為論を展開した Austin が、すでに “There is something which is at the moment of uttering being done by the person uttering” (1962: 60) という表現を使っている。これは (英語の) 遂行的発言で、一人称・単数・現在形・直説法・能動態の動詞が好まれることに関するくだりの中で出てくるのだが、もちろんここでの「現在形」は「現在私が行っていることを記述することとは無関係」であり、同じく「直説法」も「実際の事態あるいは生起している出来事について報告、記述、伝達するという意味での直説法では決してない」 (1962: 56)。カイロ方言の場合、これら話者の瞬間的現在に関わる文に対して、特定の形式 (ϕ -接頭辞活用形) が用いられ、継続的 (持続的) 現在とは区別されている。 (cf. Mitchell and al-Hassan 1994: 10-11, 20-24)

- (i) *ʔana ʔawʕid-ak ʔinn ʔaḥḍur il-igtimaaʕ bukra.*
 I promise/1s/prefix-you that attend/1s/prefix the-meeting tomorrow
 ‘明日会議に出席することを約束します。’
 (ii) *ʔazunn ʔinn ʔaʕraf-u.*
 think/1s/prefix that know/1s/prefix-him
 ‘私は彼を知っていると思う。’

ついでに言えば、(ii) における *zann* (思う) という思考動詞は、人称によって異なる形式を選択する。この例のように一人称では ϕ -接頭辞活用形が用いられるが、二人称、三人称では *bi-* 接頭辞活用形が用いられる (ϕ -接頭辞活用形を用いた場合には要求法の意味合いを帯びる)。これは日本語の「瞬間的現在/持続的現在」に対応する「思う/思っている」の使い分けともある種の平行性を示しており、興味深い。

7) 実際には、この基準の反例とも思える動詞群もあるが (例えば、人間の思考・心理を表す動詞や移動動詞など)、ここでは保留にしておく。能動分詞における移動動詞の変則的ふるまいについては、Eisele (1999: 243-246) と Brustad (2000: 185-186) が異なった観点から説明を試みている。また動詞のアスペクト的な性質とそれぞれの形式が得る解釈との関係については、Eisele (1997: Ch.7)、Cuvalay-Haak (1997: Ch.6) を参照。

- すなわち、現在指示においては、*bi-* 接頭辞活用形が動作継続を、能動分詞が状態継続を表すという、棲み分けが行われている。さらに言えば、この状態継続を表す能動分詞は、他に同様の内容を表す形式がないという点で、必須のものであり、動詞体系に最も統合されたタイプの能動分詞と言えるだろう。

黒板に書かれた列車の時刻表を見た時の、当の女性教師の発話である。

- (5) *mawaʿiid il-qīṭaraat allati tigaadir il-ʾiskandariyya, ʾana mutašakkira*
 schedules the-trains which start/3fs/prefix Alexandria I thank/fs/AP
qawi li-lli katab il-mawaʿiid di, ʾana miḥtaagaa-ha fiʿlan.
 very much to-who write/3ms/suffix the-schedules this I need/fs/AP-it in fact
 ‘アレキサンドリア発列車の時刻表ね。この時刻表を書いてくださった方に心より感謝いたします。実際、私には必要なものだわ。’ [madrasa: 66]

「書く」という行為によって生じた結果「時刻表」は、女性教師の目の前にあり、発話時点において十分認識されているはずであるが、ここでは接尾辞活用形が用いられている。

反対に、明確な「結果状態」がキャンセルされているにもかかわらず、能動分詞が用いられている場合もある。次の例は、たばこやウイスキーの入った行商用の鞆を校長に見つけられた問題生徒バハガットが、路面電車に同乗していた他人の鞆を間違えてもってきてしまったと芝居を打つ場面での発話である。バハガットはこれ見よがしに、勉強道具の入っていた（と彼が主張する）自分の鞆を失ったことを嘆く。

- (6) *ḥa-ʿmil ʾeeh fi l-imtiḥaan dilwaqti, ḥa-zaakir ʾizzayy? ik-kutub*
 do/1s/ḥa-prefix what in the-exam now study/1s/ḥa-prefix how the-books
wi-k-karariis wi-l-muzakkiraat wi-l-mulaxxaṣaat, ḥatta l-baršaam illi
 and-the-notebooks and-the-memos and-the-summaries even the-cunning paper that
ʾana miḥaddīr-u li-l-imtiḥaan. kull da yidīiʿ fi laḥza?
 I bring/ms/AP-it for-the-exam all this be lost/3ms/prefix in a moment
 ‘こうなっては、僕は試験のために何をしたらいいんだ。どうやって勉強すればいいんだ。本も、ノートも、メモも、まとめも……試験のために用意したカンニングペーパーまで！ 全てが一瞬でなくなっちゃうっていうのか？’
 [madrasa: 14]

ここでは、*ḥaddar* (用意する) という動詞が能動分詞で表わされている。用意の結果としてのカンニングペーパーは、前後の文からもわかるように手元にはないのだから、従来の説明からすればここは能動分詞を使用する環境ではないはずであろう。

さらに、具体的結果状態を想定できない、以下のような動詞についても、能動分詞が用いられることに注意されたい。

- (7) a. *il-mawqif ʾašbah xaṭiir, ḥaḍrit in-naaḳir mušīr*
 the-situation become/3ms/suffix serious (respected) the-headmaster insist/ms/AP
yiqfil il-faṣl wi-yirfid-kum.
 close/3ms/prefix the-class and-dismiss/3ms/prefix-you

‘事態は深刻になったんだぞ。校長先生が学級を閉鎖して、お前達を退学させるとおっしゃったのだ。’ [madrasa: 16]

- b. *il-malik naadir ʔinn ʔawwil waahid ʔa-yxušš ʔand-u l-leela*
 the-king vow/ms/AP that first one enter/1s/ʔa-prefix at-him the-night
walla bukra ʔa-yiqṭaʕ riqabt-u.
 or tomorrow cut/3ms/ʔa-prefix neck-his

‘王様は、今晚か明日、最初に自分の元に來た者の首をはねるとお誓いになりました。’ (Woidich 1975: 275)

(7a, b) では、それぞれ *ʔašarr* (主張する)、*nadar* (誓う) の能動分詞が用いられている。(4) の *fataḥ* (開ける) のように、結果状態が比較的明瞭である客体の変化を伴う動詞とは異なり、これらの動詞はいかなる状態変化も伴わず、当然いかなる結果状態もその動詞の中に含まれていない。このような動詞の能動分詞が表す「結果状態」とは、「主張」や「誓い」が破棄されることなく続いているという、漠然とした「効果」である。

以上見てきたように、これまで能動分詞を特徴づける性質として与えられてきた「結果残存性」や「発話時関連性」は、完全には否定されないまでも、能動分詞の使用を十分に説明しているとはいえない。

さらに、「結果」という概念自体が適切に定義されることなく、直感的に使用されてきたという不備も指摘されるべきだろう⁹⁾。先ほど比較的明瞭な結果状態をもつと述べた (4b) も、実のところ厳密な意味では結果状態を表しているとは言えない。なぜなら、「開いている」という状態にあるのは、目的語である「ドア」であり、主語「彼」の状態ではないからである。能動分詞は基本的に主語についての記述を行う形式であるから、これが顕在的(典型的には可視的)な結果状態を表すことができるのは、(8) (9) のような主語の変化を表す動詞に限られる¹⁰⁾。

- (8) a. *huwwa naam.*
 he sleep/3ms/suffix
 ‘彼は眠った。’

- b. *huwwa naayim.*
 he sleep/ms/AP
 ‘彼は眠っている。’

9) 三原 (1997) は、英語の現在完了の「結果」の概念に混乱があると指摘し、それを修正すべく、変化が主語に現れる場合のみを「結果」、目的語が変化する場合は「完了」と呼んでいる。ここでは、文法が記述すべき「結果」と語用論的な「結果」の区別が強調されているのだが、この視点はカイロ方言の能動分詞においても有効であると思われる。

10) 能動分詞によって主語の顕在的な結果状態を表すことができるのは、基本的に変化を表す自動詞であるが、他動詞であってもその変化が主語に戻ってくる再帰的な動詞の場合には、同類と認めることができる。

- (9) a. *huwwa libis badla.* b. *huwwa laabis badla.*
 he put on/3ms/suffix a suit he put on/ms/AP a suit
 ‘彼はスーツを着た。’ ‘彼はスーツを着ている。’

これに対して、目的語の変化を表す動詞については、顕在的な結果状態はあくまでも目的語の側にあるのであって、これを明示的に表すのは受動分詞である。能動分詞が表すことができる結果状態とは、主語の動作によって目的語が状態変化を経た後の、語用論的に推測される状態である。

このような「結果状態」の違いを、Eisele (1999: 226-227) は二つの時点 (過去の出来事と現在の状態) に対する重点の置き方の違いとしてとらえ、次のような3段階に分類した¹¹⁾。

- (10) a. resultative state (past event is strongly implied)
 b. present state (no event implied or less strongly implied)
 c. present perfect state (present state as well as past event)
- (11) a. *ʔana kaatib ig-gawaab.*
 I write/ms/AP the-letter
 ‘私は手紙を書いた。’ (resultative state)
- b. *ʔana ʔaarif ʔe illi ʔawz-u.*
 I know/ms/AP what that want/ms/AP-it
 ‘私は彼の欲しいものが何か知っている。’ (present state)
- c. *huda mʔaggara šaqqa gdiida.*
 Hoda rent/fs/AP a flat new
 ‘ホダは新しいアパートを借りている。’ (present perfect state)

彼は、このような段階が、動詞の語彙的アスペクトと能動分詞の形式的アスペクト (状態性) とのコンフリクトの度合いに応じて生じるとする。すなわち、ある動詞が主語の物理的あるいは認知的状態を示す場合、「状態性」の指示を本務とする能動分詞は、問題なくその物理的・認知的状態を表すことができる。しかし、動詞が一切状態を含まない場合、能動分詞はいかなる状態とも結びつくことはできず、過去における出来事に重点が置かれることになるが、同時にある種の抽象的静態 (結果状態) も含意される、というのである。

本稿は、能動分詞が意味する結果状態のあり方に関心があるのであって、特に個々の動詞語彙と (10) のような能動分詞に付される解釈が一対一で対応していなければならないとは考えていないため、基本的には (10a, b) の二

11) Eisele はこのような能動分詞の意味に基づく分類を、動詞分類の基準として用いている。

つのカテゴリーで十分であると考える¹²⁾。これをふまえて、さらに様々な動詞群との関連を含めた補足説明を行うならば、以下のようになるう。

個々の動詞はそれぞれの意味構造をもっているが、能動分詞は基本的にそのうちの状態的局面、すなわち非動的 [-dynamic] かつ継続的 [+durative] という素性をもつ局面を選び出す。人間の心理・感覚を表す動詞 (ʕaaz, ḥass, xaaʃ, šaaʃ)、具体的動作を欠き、主に長期活動を表す動詞 (ʕaaš, sikiin, šaam)、主語の状態・位置変化を表す動詞 (naam, qaʕad, fisid)などは、前述の意味素性をもつ状態的局面を動詞の意味構造の中に備えているため、能動分詞が問題なくその局面を表す。一方、動作のみを表す動詞 (raqaš, kal, zaakir)、目的語の変化を表す動詞 (fataḥ, naḍḍaf)、遂行動詞 (ʕašarr, ʕamar)などは、動詞固有の意味として状態的局面を含んでいないため、能動分詞はそれに準ずる疑似状態的局面を表さざるを得ない。そしてこのような疑似状態的局面として認識されるのは、あくまでも動詞が表す出来事(行為)から、一般知識や分脈の力を借りて推論される、語用論的結果(効果)の継続なのである。

以下では、前者、すなわち過去の出来事の含意の有無に関わらず、現在における顕在的状态を表すものをまとめて「状態継続」と呼び、後者、すなわち抽象的・非顕在的状态の継続を「効果継続」と呼ぶことにするが、この区別は否定形式の選択という文法現象の違いとしても現れてくる。

4. 状態継続と効果継続

カイロ方言には、2種類の否定辞がある。一つは *miš* で、主に名詞句や *ḥa*-接頭辞活用形に前置され、その句を否定する否定辞、他方は主に接尾辞活用形、*ḥa*-接頭辞活用形以外の接頭辞活用形、所有を表す前置詞句などに対して用いられる否定辞で、こちらはその句を *ma* と *š* でくる¹³⁾。

能動分詞は形態的には名詞であるから、基本的には *miš* で否定するのが順当と思われる。しかし実際に、*miš* で否定されるのは「状態継続」を表す能動分詞であり、「効果継続」を表す能動分詞に対応する否定形は、*ma*-接尾辞活用形 *-š* という形式である (cf. el-Tonsi 1992: 43)¹⁴⁾。

12) Eisele も (10c) のタイプが「いくぶん変則的なカテゴリー (something of an anomalous category)」であると述べている (1999: 227)。

13) Brustad (2000: 281-282) は、前者を Predicate Negation、後者を Verbal Negation と呼んでいる。

14) ただし同じく Brustad によれば、「分詞に関わる否定のパターンは、この統語カテゴリーのもつ不完全な動詞的性質を反映する」という。能動分詞は通常 Predicate Negation によって否定されるものの、シリア、クウェート、モロッコ、上エジプトの方言では、パーフェクト相を示す、あるいは目的語を取るといった、動詞的意味をもつ能動分詞に対して Verbal Negation が用いられる場合もある (2000: 289-291)。

5. 「効果継続」を表す能動分詞とモダリティ

本節では、先行研究でしばしば言及されてきた、能動分詞がもつモーダル機能について検討する。これは、「確信性の機能」(Denz 1971: 115)、「出来事の実現を強調する」(Cuvalay-Haak 1997: 196)、「話者の間で交わされる攻撃や軽蔑といった態度、物事の過程ががいかにきちんと終えられたかの強調、話者側の意志の強さを伝える」(Caubet 1991: 221)といった言葉で表現されてきたものである。特に Caubet は能動分詞のモーダル機能重視の立場を取っており、「能動分詞を十分に理解するためには、それが名詞形であることに留意しなければならない。名詞形はその形態自体に何のアスペクト対立の印ももっていないのである。能動分詞が表すのは、本質的には極めて強い話者とのつながり、話者の側の特別な関与である。それがもつアスペクト的意味はモーダルの意味よりもずっと重要性が低い」(1991: 221)とまで述べている。

ただし、筆者はカイロ方言の能動分詞の全てがモーダルな意味と結びついているとは考えていない。能動分詞が発話時と同時に成立する顕在的な状態を表している場合、すなわち「状態継続」の場合には、その能動分詞は基本的には命題内容、すなわち客観的意味成分を表しているのであり、特に話者の主観を表すモダリティを含んでいるとは思われない。第2節で述べたように、このタイプの能動分詞は、発話時との同時性を表し、動的な継続性を表す *bi-* 接頭辞活用形と、命題内容レベルでの相補的な関係をなす。話者の判断や意図が関わってくるのは、「効果継続」を表す能動分詞（および、本稿では扱わないが未来指示の能動分詞）である。第3節で、過去の出来事を表す接尾辞活用形と（効果継続を表す）能動分詞が、物理的な結果残存の有無という命題内容レベルでの違いに帰することができないことを指摘した。むしろ能動分詞は、モーダルな意味、あるいは発話レベルでの情報を提供するという点で、接尾辞活用形と区別されると考えられる。以下では、話者による「共有知識」の想定という観点 (cf. Fenn 1987: 179-185) から、接尾辞活用形と能動分詞との使い分けを観察したい。その際、両形式の違いを明確にするため、なるべく同じ動詞を比較するという手法をとる。

6. 分析

次の例は、ある高校の校長 (A) が、大量のいたずら手紙を隣の女子校に送った犯人をつきとめようとし、疑いのある問題生徒バハガット (B) を前にして、問題の手紙の束をもって追求する場面である。ここでは、*ba'at* (送る) という動詞の接尾辞活用形と能動分詞が、話者の想定の変化に応じて、臨機

応変に使い分けられている。

- (15) A. *ig-gawabaat di iddit-haa l-i nazrit madrasit il-banaat*
the-letters this give/3fs/suffix-them to-me principal school the-girls
illi ganbi-na, miin illi baa'it-ha?
which beside-us who that send/ms/AP-them

‘これらの手紙は、隣の女子校の校長が私のところへもってきたものだ。
これを**送った**のは誰だ。’

- B. *miš 'ana.*
NEG I

‘僕じゃありません。’

- A. *'ummaal miin? (中略) miin illi ba'at il-gawabaat di?*
then who who that send/3ms/suffix the-letters this

‘それじゃあ誰だ? (中略)これらの手紙を**送った**のは誰なんだ?’

- B. *'ana ma-ba'att-š dool, 'ana ba'att dool.*
I NEG-send/1s/suffix-NEG these I send/1s/suffix these

(手紙を調べて二つに分ける) ‘僕はこっちは**送ってません**。こっちを**送り**
ました。’

- A. *miin ba'at il-baaqi?*
who send/3ms/suffix the-rest

‘誰が残りの手紙を**送った**のだ?’

- B. *'ana mas'uul 'an nafs-i bass.*
I responsible for self-my only

‘他人のことは知りません。’

- A. *itfaḍḍal ya siid-i, ba'it gawabaat li-bint 'anda-ha xamastaašar sana.*
please oh mr-my send/ms/AP letters to-girl at-her fifteen year

‘まあ、よかろう。お前は15歳の少女に手紙を**送った**んだな。’

- B. *sittaašar.*
sixteen

‘16です。’

この校長は、呼び出した生徒バハガットがいたずらの主であるか、少なくとも彼が共犯であるという想定のもとで最初の質問を行っており、そこでは、能動分詞 *baa'it* が用いられている。バハガットの「僕じゃありません」という返答からも、彼が犯人扱いされていることを自覚しているのがわかるだろう。しかし、この返答によって、校長の想定はくつがえされ、再度、校長が全く同じ内容を問い直す文では、接尾辞活用形が用いられている。この問いに対して、バハガットは先ほどの答えを一転させ、まるで校長をからかうかのように、手紙の一部は自分が送ったもの、一部はそうでないものだという新情

報を提供する。ここでも接尾辞活用形が用いられる。この返答に対する校長の続く質問においては、バハガットが関与していない手紙については接尾辞活用形が、バハガットが送った手紙に関する確認の質問では能動分詞がそれぞれ用いられている。

再度強調するが、ここでは、能動分詞がもつパーフェクト的意味に関する従来の説明、つまり「過去における事態から生じた結果状態が発話時まで続いている」という点がほとんど重要性をもっていない。というのも何者かが大量の手紙を女子校へ送ったという出来事の結果としての手紙は、もはや女子校にはなく、現在校長の手の中にある。この事実が変わりはない。にもかかわらず、対話者の一人である校長は一連の会話の中で、接尾辞活用形と能動分詞を使い分けているのである。むしろ、ここで重要なのは、過去における事態についての知識が対話者間で共有されている、すなわち既知の話題であると話者が想定する場合に、能動分詞が用いられているということである。反対に、話者が共有知識を想定せずに新情報を提供する場合や、すでにあった想定をキャンセルされた場合には、接尾辞活用形が用いられる。

次に、*ḥattī* (置く) という動詞について類例を見てみよう。次の例は、試験に落第した生徒アフマド (A) に、女性教師アフーフ (B) が試験合格のコツを指南する場面である。

- (16) A. *ʾana mutašakkir ya ʾaanisa ʿafaaf, tuul ʿumr-i b-agaawib zayy*
 I thank/ms/AP oh miss Afaf during life-my answer/1s/bi-prefix as
ma ʾana faahim.
 that I understand/ms/AP

‘ありがとうございます、アフーフ先生。僕はこれまで自分が理解しているとおりに答えていました。’

- B. *w-li-zaalik bi-tusqut. laazim tigaawib zayy ma humma*
 and-for-that drop/2ms/bi-prefix must answer/2ms/prefix as that they
fahmiin.
 understand/mp/AP

‘だから落第するんです。あなたは彼らが理解しているとおりに答えねばなりません。’

- A. *humma miin?*
 they who

‘彼らって誰ですか?’

- B. *illi ḥattiin il-imtihaan.*
 who put/mp/AP the-examination

‘試験を作った人のことよ。’ [madrassa: 104]

ここで、「試験」は二人の話題の中心であり、能動分詞の使用は先ほどの「既

知の話題」「共有知識」という観点から説明可能である。

共有知識は現場性からも生じる。次の例は、校長に呼び出された生徒バハガットが校長室に入った時、自分が売り物のたばこやウイスキー、セーターなどが入った鞆を下げていることを思いだし、部屋を飛び出して、再び手ぶらで戻ってきた後の会話である。この例では、校長はバハガットの行動を見ていて、彼が鞆を隠したことを知っている。校長(A)は *ḥatt* (置く) だけでなく、*saab* (残す) という動詞についても、能動分詞を用いてバハガット (B) を問いつめている。

(17) A. *ʔeeh illi ʔinta ḥatt-u hinaak da?*

what that you put/ms/AP-it there that

‘そこにお前が置いたものは何だ?’

B. *di iš-ṣaṇṭa.*

that the-bag

‘あれは鞆です。’

A. *ṣantit ʔeeh?*

bag what

‘何の鞆だ?’

B. *ṣantit ik-kutub.*

bag the-books

‘本が入った鞆ですよ。’

A. *wi-sayib-ha barra leeh?*

and-leave/ms/AP-it outside why

‘それじゃあ、何で外に出したんだ?’ [*madrasa*: 11]

一方、同じ *ḥatt* という動詞の接尾辞活用形が用いられている例を見てみよう。

(18) A. *qabli ma ʔawaddii-kum fi dahya, miin illi saraq ʿarabiyyit*

before that set/1s/prefix-you in calamity who that steal/3ms/suffix car

rayiis maktab mukafhit is-sayyaaraat wi-ḥatt-aha quddaam

chief office combat the-cars and-put/3ms/suffix-it in front of

beet-u?

house-his

‘お前達を痛い目に遭わせる前に一つ聞いておこう。駐車違反撲滅事務所長の車を盗んで彼の家の前に留めたのは誰だ?’

B. *ʔanhu ʿarabiyya? il-folkus il-ḥamra mudiil 66?*

which car the-Folks the-red model 66

‘どんな車ですか? 66型の赤いフォルクスでしょうか?’ [*madrasa*: 33]

これは、校長(A)が生徒ムルシー (B) に対して行った発話である。この直前では、別の先生が会議を欠席することを伝えに校長室にやって来て、校長としばしやりとりをした後退出している。そして校長が (18A) のように話を切り出す。この間、校長とムルシーは会話をしておらず、校長はいきなり車の盗難事件の話題を導入したことになる。また (17A) のように校長が現場を目撃したわけではないので、二人の間に共有知識が構築されているとも考えられない。このような環境では、接尾辞活用形が用いられている。

次は、*katab* (書く) の対比を示そう。(19) は、校長が二人の生徒を前にして生徒の誰かの作と思われる恋愛詩を二行ほど読んで、その作者を尋ねる場面、(20) は、アフーフ先生(A)に個人授業をしてもらったアフマド (B) がお礼にお金を差し出そうとする場面である。ここでも、既知の話題について述べる前者では能動分詞が、新情報を提示する後者では接尾辞活用形が用いられていることがわかる。

- (19) *miin illi kaatib iš-ši'r da?*
who who write/ms/AP the-poem this

‘誰がこの詩を書いたんだ?’ [madrassa: 35]

- (20) A. *gibt filuus mineen?*
bring/2ms/suffix money from where
‘どこでお金を手に入れたの?’

- B. *iş-şeeḫ daxal, bi't ‘aṣar qaṣaayid, wi-katabt*
the-summer enter/3ms/suffix sell/1s/suffix ten poems and-write/1s/suffix
gawabeen.
a few letters

‘夏がきましたから、10ほど詩を売って、2、3通手紙を代筆してやりました。’
[madrassa: 104]

このような共有知識の想定は、戦略的にも用いられる。つまり、そのような想定を聞き手に強要するのである。能動分詞を用いることは、いわば話者が聞き手とある知識を共有していることを信じている表明であるから、ここから確認、強い主張、場合によってはあてこすりや押しつけといった意味効果を生む。

- (21) A. *‘awwil marra ‘aṣrif ‘inn ibn-i taagir ṣaṇṭa.*
first time know/1s/prefix that son-my merchant bag

‘私の息子が行商をやっているなんて私は初めて知ります。’

- B. *‘ihiih, da ‘inta lissa ṣaari minn-i qaruuṣit kent ‘awwil imbaariḥ.*
oh this you just buy/ms/AP from-me carton Kent the day before yesterday

‘おいおい。あんた一昨日俺からケントを一カートン買ったばかりじゃな

いか。’

- A. *qult l-i ʔinn-ak gayib-ha min waaḥid ṣaḥb-ak.*
 say/2ms/suffix to-me that-you bring/ms/AP-it from one friend-your
 ‘お前が友達からもらったと言ったから。’ [madrasa: 16]

一方、接尾辞活用形は逆の戦略、すなわち共有知識をもっているという話者の想定をくつがえし、責任逃れをしたり、自らの事態へのコミットメントを否定する際に用いられる。

- (22) A. *miš mumkin, miš maʕquul, mustaḥiil, ʔeeh illi gaab*
 NEG possible NEG reasonable impossible what that bring/3ms/suffix
il-ḥagaat di hina?
 the-things these here

‘ありえない、おかしいぞ、ありえないに決まってる、こんなものがどうしてここにあるんだ? (lit. 何がこれらのものをここへもってきたのか)’

- B. *laa ya šeex, istahbil, istahbil.*
 no oh master play the fool/imperative play the fool/imperative
 ‘もういい、お前さん。勝手にとぼけてるがいい。’ [madrasa: 14]

この例では、*gaab* (もってくる) の目的語 *il-ḥagaat di* (こんなもの) が発話時において「ここ」にあるため、*gaab* の結果状態が発話時まで続いていると考えられる。しかしここでは、接尾辞活用形を用いることで、この事実に対する自らの関わりを否定しているのである。

7. 結論

本稿では、現在指示および過去指示において能動分詞がもつ「結果性」に関して、顕在的な状態継続と非顕在的な状態＝効果継続の二つがあると指摘し、先行研究で触れられている能動分詞の「モーダル」な機能とは、後者の「効果」を表す能動分詞において生じるものと考えた。また、能動分詞が用いられている環境を分析することにより、能動分詞は、話者が聞き手との間で知識を共有しており、話題を既知のものにとらえていることを聞き手に明示する機能をもつことがわかった。能動分詞は、その形式自体に時間指示機能を備えているわけではない。したがって、能動分詞が用いられるためには、予め時間の定位が行われている必要がある。この条件は、先行文脈によってすでにその出来事にまつわる話題が提供されているか、対話者が現場に居合わせることによって満たされる。一方、接尾辞活用形は、それ自体過去指示を行う能力をもっているため、このような制約にとらわれることなく、対話者間の共有知識がない場合でも使用可能である。よって出来事が生起する時

間に関する予備知識のない聞き手に対して、新しい情報を提供する場合には、こちらが選択されるのである。すでに提供された話題についてさらに会話が続けられる場合には、もはやテンスを明示しない能動分詞でも、対話者の間にその事象が起こる時間の情報は共有されているため、会話の進行を妨げることはない。いずれにせよ、この種の能動分詞は「語り」よりも「対話」のコンテキストの中で頻繁に現れるものであり、極めて話者志向の強い性質をもっていると言える。

言語に課された最も重要な役割が情報の交換であるとする、話し手は対話相手との情報交換を円滑に進めるために、前もって相手の知識を想定しておく必要がある。日本語の指示詞や終助詞は、まさにこのような知識の想定に基づいて選択される文法形式の例と言えよう。カイロ方言でも、能動分詞の一部が共有知識の想定を表明する機能の一端を担っているのだと考えられる。

〔転写方式〕 アルファベット順に以下の通り。

ʔ/b/t/(t) t or s/g/h/x/d/(d) d or z/r/z/s/š/š/d/ṭ/z/ʕ/g/f/q (=ʔ) or Q (=q)/k/l
/m/n/h/w/y

〔引用文献〕

- Austin, J.L. 1962 *How to do things with words*. Oxford: Oxford University Press. (坂本百大訳 1978『言語と行為』大修館書店)
- Brustad, Kristen E. 2000 *The syntax of spoken Arabic: A comparative study of Moroccan, Egyptian, Syrian, and Kuwaiti dialects*. Washington, D.C.: Georgetown University Press.
- Caubet, Dominique. 1991 "Active participle as a means to renew the aspectual system: A comparative study in several dialects of Arabic". In Alan S. Kaye (ed.), *Semitic studies in honor of Wolf Leslau, on the occasion of his 85th birthday volII*, Wiesbaden: Harrassowitz, 209-224.
- Comrie, B. 1976 *Aspect*, London: Cambridge University Press.
- Cuvalay-Haak, Martine. 1997 *The Verb in Literary and Colloquial Arabic*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Denz, Adolf. 1971 *Die Verbalsyntax des neuarabischen Dialektes von Kwayriš (Irak)*. Wiesbaden: Kommissionsverlag Franz Steiner GMBH.
- Eisele, John C. 1990a "Time reference, tense, and formal aspect in Cairene Arabic". *Perspectives on Arabic Linguistics I*, 173-212.
- Eisele, John C. 1990b "Aspectual classification of verbs in Cairene Arabic". *Perspectives on Arabic Linguistics II*, 192-233.
- Eisele, John C. 1999 *Arabic verbs in time: Tense and Aspect in Cairene Arabic*. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.
- Fenn, Peter. 1987 *A semantic and pragmatic examination of the English perfect*. Tübingen: Gunter Narr Verlag.
- Ibn Yaʿīš. n.d. *Šarḥ al-Mufaṣṣal* 3 vols., al-Qaahira: Maktabat al-Mutanabbī.

- Khan, Geoffrey. 1999 "The Neo-Aramaic dialect spoken by Jews from the region of Arbel (Iraqi Kurdistan)". *BSOAS* 62, 213-225.
- Kinberg, Naphtali. 1992 "Semi-imperfectives and imperfectives: A case study of aspect and tense in Arabic participial clauses". *Lingua* 86, 301-330.
- Lipiński, Edward. 2001 *Semitic languages outline of a comparative grammar*. Leuven: Peeters.
- McCarus, Ernest N. 1976 "A semantic analysis of Arabic verbs". In Orlin L. (ed.) *Michigan studies in honor of George G. Cameron*, Michigan: Department of Near Eastern Studies, University of Michigan, 8-28.
- Mitchell, T.F. 1952 "The active participle in an Arabic dialect of Cyrenaica". *BSOAS* 14, 11-33.
- Mitchell, T.F. 1978 "Educated spoken Arabic in Egypt and the Levant, with special reference to participle and tense". *Journal of Linguistics* 14, 227-58.
- Mitchell, T.F. and al-Hassan S.A. 1994, *Mood, Modality and Aspect in Spoken Arabic*. London and New York: Kegan Paul International.
- 三原健一 1997「動詞のアスペクト構造」『ヴォイスとアスペクト』研究社出版. 107-186.
- 中右実 1979「モダリティと命題」『英語と日本語と』林栄一教授還暦記念論文集 くろしお出版. 223-250.
- 中右実 1994『認知意味論の原理』大修館書店.
- Sibawayh. (ed. ‘abd as-salām muḥammad hārūn) 1983 *Kitāb Sibawayh* 5 vols., al-Qāhira: Maktabat al-xāniji.
- 高階美行 1988「現代中央アラム語」「現代西アラム語」「現代東アラム語」「現代マנד語」『言語学大辞典 第1巻』三省堂. 1635a-6b, 1636b-8b, 1638b-46a, 1646a-7b.
- Takashina, Yoshiyuki. 1990 "Some Remarks on Modern Aramaic of Heretevin". *Journal of Asian and African Studies* 40, 85-132.
- el-Tonsi, Abbas. 1992 *Egyptian colloquial Arabic: A structure review*. Cairo: American University in Cairo.
- Vendler, Z. 1967 "Time and verb". In *Linguistics and Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.
- Wild, von Stefan. 1969 "Die resultative Funktion des aktiven Partizips in den syrisch-palästinischen Dialekten des Arabischen". *ZDMG* 114, 239-254.
- Woidich, Manfred. 1975 "Zur Funktion des aktiven Partizips im Kairenisch-Arabischen". *ZDMG* 125, 273-93.